

令和2年度 ACTR

分類 番号	A4	取組 名称	丹後ちりめんアーカイブ構想
研究代表者所属・職名：		文学部・教授	氏名： 小林 啓治
研究担当者： 京都府立大学（東 昇、山口美知代（敬称略）） 外部分担者・協力者（小山元孝氏）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） こまねこまつり実行委員会・NPO法人TEAM旦波			
【研究活動の要約】			
<ul style="list-style-type: none"> ・丹後織物工業組合（京丹後市）が1920年代から現在まで刊行している『丹後縮緬』『丹後織物』を調査。同誌の記事が単に縮緬業だけでなく、地域社会の構造を歴史的に解明するためにも重要なものであることが改めて確認された。この史料を骨格としてデジタルアーカイブを構築するために、1950年代までのものを、5回にわたり撮影してデジタルデータとして保存した。 ・丹後織物工業組合に保存されている近世文書の解読と目録作成。これによって、これまで根拠が曖昧だった近代以前の丹後縮緬の歴史が、具体的な史料によって跡づけられた。 ・京都府織物・機械金属振興センター（京丹後市）に保存されている縮緬の見本帳を調査。デザインの変容や販路について分析を行った。 			
【研究活動の成果】			
<p>丹後縮緬の歴史アーカイブを構成するために、骨格として次のようなテーマを立てて、史料を配置することができた。①丹後震災の被害、それをどう克服し新たに縮緬業を展開していくのか。②1930年代の好景気の要因と実態。③人絹が導入されることでもたらされた縮緬業の変化。④日中戦争以降の生産額の変動、軍需優先となっていくなかで迎える苦境。⑤アジア・太平洋戦争期の軍需への対応。⑥戦後の丹後縮緬業界の状況と復興の足取り。⑦不況からガチャマンと言われる急成長への転換の契機と実態。⑧生活様式の変容と縮緬産業の苦難。</p> <p>京都府織物・機械金属振興センターが保存する見本帳（縮緬の生地のサンプルを解説とともに編集したもの）を調査した。この資料は、視覚面からアーカイブへの関心を高め、時代に即したデザインの変容を理解するものとして最適であり、アーカイブのもう一つの柱として位置づけることができる。</p> <p>『丹後縮緬』『丹後織物』を用いて縮緬業の歴史を追うとともに、その時々縮緬のデザインの流行を視覚的に配置することで、「ちりめんアーカイブ」の全体像を描くことができた。</p>			
【研究成果の還元】			
<ul style="list-style-type: none"> ・丹後郷土資料館の企画展「ふるさとミュージアムコレクション」（2021年3月20日～4月4日）の中で、本ACTRで対象とした資料展示を実施。 ・提案者および関係者に対して報告会（3月16日14時～15時30分、丹後郷土資料館、10名）。 ・報告書は『京都府立大学フィールド調査集報』（2021年3月）に「『丹後縮緬』が刻む地域社会の歴史」として掲載（府大図書館で閲覧可） 			
【お問い合わせ先】			
		文学部 教授 小林 啓治	
		Tel: 075-703-5254	E-mail: orochi@kpu.ac.jp

参考（イメージ図、活動写真等）

①『丹後縮緬』『丹後織物』（丹後織物工業組合所蔵）



②活動内容は『京都新聞』2020年9月4日（丹後中丹版）にとりあげられた。

京丹 丹後 2020年(令和2年)9月4日 金曜日



丹工の広報紙を撮影してデジタル化する小林教授(左)と学生たち＝1日、京丹後市大宮町・丹後織物工業組合

今年創業100周年を迎えた丹後ちりめんの文獻や技術を次世代に残そうと、京丹後市のNPO法人や京都府立大、福知山公立大などが、デジタルアーカイブ化に取り組み始めた。丹後織物工業組合(同市)の大正期から続く広報紙の撮影などに着手しており、今後は職人らへの聞き取りも進める予定という。

丹ちりの文獻・技術次世代に

NPOや府立大、福知山公立大デジタルアーカイブ化

同市の民間団体はNPO法人「TEAM丹波」と「しまねごまつり実行委員会」。両団体とも住民有志らの集まりで丹後の歴史やちりめん文化を研究、発信するなどしている。

両団体に所属する元市文化財保護課の小山元孝さんによると、丹工の広報紙やポスター、府織物・機械金属振興センターにある生地設計書や海外を含む布地の見本帳などさまざまな史料が残されているという。これらの史料を多くの人が活用できるようにデジタル化して公開したいという。

大正の広報紙撮影 職人聞き取りも

アーカイブ化の動きに、府立文学部の小林啓治教授(近代史)や福知山公立大なども加わった。6月と今年1、2日には小林教授とゼミ生らが丹工を訪れ、大正11年に創刊した丹工の広報紙

戦後は、分析すると業界だけでなく地域社会の流れも分かるだろう」と期待する。職人たちに聞き取りをした技術のデジタル化も目指していきたい。(片村有宏)



創刊間もない大正期の丹後織物工業組合の広報紙

の撮影を始めた。小林教授は「長い期間にわたる史料があり歴史をたどることができる。例えば、丹後震災からどのように業界が復興の道をとったのか。戦中、